



慢性疼痛における最近の話題

—刺激鎮痛法も含めて—

大会会長・日本大学名誉教授

総合東京病院ペイン緩和センター長

東京八重洲クリニック・ペインクリニック

小川節郎

医家における痛みの診療科であるペインクリニック科を訪れる患者では少なくとも半数以上の患者が慢性疼痛を有している。用いる対応法としては薬物療法、神経ブロックなどのインターベンション療法、低反応レベルレーザー照射療法、そして神経刺激療法が行われている。これらの療法を適応する場合には、やみくもに行うのではなく、患者が有する痛みがどのような機序で起こっているかを見定める必要がある。一方、痛みの機序には、組織損傷が起こり炎症に起因する侵害受容性疼痛、神経組織が障害されて神経の異常興奮が起こって発生する神経障害性疼痛、そしてこれまで心因性疼痛と言われてきた心理・社会的・精神的な要因で発生する疼痛の3つに分類され、それぞれに対応する治療法を選択する。最近、この心因性疼痛は、国際疼痛学会により「痛覚変調性疼痛」と名称を変更された。この範疇に入る疾患名としては、慢性腰痛、慢性疲労症候群、線維筋痛症が有名である。これらの病態では、身体の組織や器官になんの障害も認められないのに全身の多領域に痛みを訴えることが特徴である。非ステロイド性抗炎症薬や医療用麻薬さえ効果が出ず、神経ブロックも奏功せずに治療は非常に難渋する。うつ状態、慢性の疲労感、睡眠障害などを伴う。最近、この病態が脳内神経回路の変容に因ることがわかってきた。講演ではこの痛覚変調性疼痛にまず焦点を当てたい。

スピリチュアルペインの理解が進んできた。単純に霊的な痛みとされてきたが、この痛みの定義として「自己の存在と意味の消失から生じる痛み」が挙げられている。すなわち、自己の将来に絶望を感じたり、自分の居場所がないと感じるような場合に起こる痛みである。医療の現場、特にがん終末期に患者が被りやすい痛みである。講演ではこの痛みにも触れる。

その他、臨床で用いている刺激療法の実際についても紹介したい。

●プロフィール

(現職) 日本大学名誉教授

総合東京病院 ペイン緩和センター長

東京八重洲クリニック ペインクリニック内科

(略歴) 1972年日本大学医学部卒業

日本大学医学部循環器内科学教室、同麻酔科学教室、日本大学講師ペインクリニック室長を経て、1983年から米国ワシントン州立大学麻酔・科留学

日本大学助教授を経て、1997年より日本大学医学部麻酔科学講座主任教授

2002年より駿河台日本大学病院病院長

2013年より日本大学総合科学研究所医教授

2017年に総合東京病院ペイン緩和センター開設

麻酔科指導医・専門医、ペインクリニック専門医

(資格) 日本慢性疼痛学会理事長、日本臨床麻酔学会監事、日本ペインクリニック学会代表理事、

日本疼痛学会名誉会員、日本麻酔科学会名誉会員、日本運動器疼痛学会理事